



かもめ風だより

2016.5

VOL 5



メニュー紹介

扉の写真…「昭和57年2月6-7日 第2回NHK杯カーリング大会」

この人・この作品…宇江佐 真理『寂しい写楽』

花形みつる『しばしとどめん北斎羽衣』

音の缶詰・CDレビュー…魅力的な女性ミュージシャン列伝 ダイアナ・ロス

「シュプリームス・アルティメイト・コレクション」

「ベスト・オブ・ダイアナ・ロス」

「ワーキング・オーバータイム」

いちおしコミック…やまだ紫『しんきらり』『空におちる』『性悪猫』

■扉の写真

昭和57年2月6-7日の2日間にわたって行われた第2回NHK杯カーリング大会（NHK北見放送局と常呂町の主催）です。場所は、常呂町スポーツセンターの西側裏。参加チームは、北見・網走・池田など5市町村から18チーム。男子優勝は池田町、女子の優勝は常呂町のポパイ&オリーブでした。



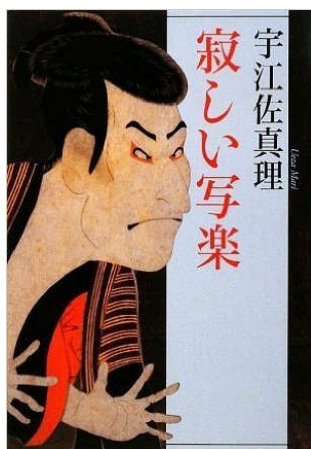
こ	の	人	
---	---	---	--

宇江佐 真理 『寂しい写楽』

こ	の	作	品
---	---	---	---

花形 みつる 『しばしとどめん北斎羽衣』

▶今回は、「葛飾北斎」にまつわる物語を2冊紹介



●前回に続き、宇江佐真理さんの作品『寂しい写楽』から。この作品には「写楽」のタイトルが付いていますが、物語の主人公は、ともに人生の岐路に立つ「蔦屋重三郎」と後の「山東京伝・滝沢馬琴・葛飾北斎・十返舎一九」の面々。写楽を売り出すことで起死回生を果たそうとする蔦屋重三郎の誘いに北斎らが応じ、チームを組んで大量に生み出される写楽の首絵の仕上げをしたり、売り出す算段に加わります。写楽の影武者のような役割です。●北斎は当時、師匠の怒りを受けて仕事を干され、唐辛子売りをしていました。取りあえずの稼ぎとメンバーから受ける刺激、無名の写楽をプロデュースするという「熱」の中に身を置くことで、改めて自分が根っからの絵師だということを強く意識します。●結

局、この写楽プロジェクトは失敗に終わり、写楽はわずか10ヶ月で存在を消してしまいます。●北斎は、山東京伝とその頃を振り返って「まずい絵ばかりやっていると寂しくなりやしてね」と語り、そのことを聞いた十返舎一九が写楽から自らの絵の感想を問われた時に「寂しかったからでしょう。見る者の背中をざわざわと粟立てるような寂しい絵でした」と返します。●17年を経て、物語の最後で北斎は、「写楽の絵はあの時、確かに異彩を放っていた。それが北斎の気持ちと妙に符合したような気もする。結局、写楽の持っていた寂しさは己の寂しさでもあったと合点する。それは北斎に限らない。京伝も一九も、いや蔦屋重三郎も同じ穴のむじなだったのだ。写楽に手を貸してよかった。北斎はそう思う。あれを踏み台にして次の世界に羽ばたくことができたのだから」と吐露し、物語は終わります。この作品では、「寂しさ」の意味が大事なポイント。〈つまらなさ・ものさびしさ・嫌悪感・むなしさ〉などいろいろな気持ちが込められています。●後世に残る作品を生み出した異能の職人たちの物語は、パートごとに主人公が替わり、それぞれの視点で物語を進め、思いを語るのも、好みの主人公に肩入れして読むことができます。



●『しばしとどめん北斎羽衣』（2015年）は、なんと数え年で89歳、亡くなる前年の北斎が東京にタイムスリップするところから物語がスタート。●主人公の為一は登校拒否中の中学生で父親は骨董屋。父親は北斎の作品に通じていた為一の祖父が始めた店を継ぎますが、目利きができず、経営は青息吐息。反面、為一は祖父から本物に直に接する機会を与えられ、見る目は確か、とりわけ北斎ものはかなりのもの。そんな2人の前にかい巻き着込んだ怪しい風体の北斎が現れます。●為一の父親は、店の窮状を打破するために北斎に絵を描いてもらおうと画策し、その世話役として為一が担う羽目に…。北斎は思いの外、現代に馴染み、北斎と為一は東京のあ

ちこちへ出かけ、北斎は自分の目で見て興味を惹かれた人間をデジカメのように脳内カメラで写し取り、サインペンを使い、超絶テクニックでスケッチブックに描いていきます。文中、それは「北斎最大のヒット作となった漫画の現代版」と表現しています。●ところで、北斎はなぜ現代に現れたのか？この物語もその「なぜ？」をテーマにして組み立てられ、読者が驚くしかけをいくつも用意されています。読んでお楽しみですが、年老いてなお創作意欲が増し、未知の領域に挑む北斎のエネルギーの源と北斎の娘／阿栄（おえい）との関係を解き明かすために作者が用意した〈しかけ〉が「なぜ？」の回答。しかけの鮮やかさとタイトルの意味に驚きます。そして、おまけの「エピローグ」がおしゃれ。



魅力的な女性ミュージシャン列伝 ダイアナ・ロス

「ダイアナ・ロス&シュープリームス
アルティメイト・コレクション」



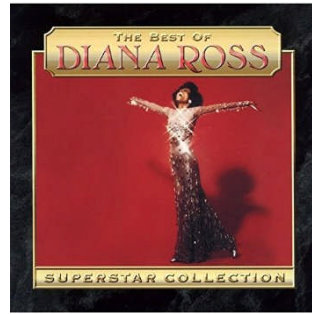
「ベスト・オブ・ダイアナ・ロス」
「ワーキング・オーバータイム」

ダイアナ・ロスの出発点は、「シュープリームス」のリードボーカル。シュープリームスはガール・グループで、モータウン・レコードと契約した1961年、ダイアナ・ロスは16歳でした。

最初のヒット曲は、1964年の「愛はどこへ行ったの」。この曲でダイアナはリードボーカルの地位を確立し、69年までヒット曲を出し続けます。『モータウン・ミュージック』（早川書房）には、当時の音楽プロデューサーの言葉として「ダイアナ・ロスのサウンドはとてもユニークだった。他のどんなシンガーとも違ったサウンドを持っていた。それが大事なんだよ。彼女しか出せないサウンド…心地よいサウンドを持っていたことが決め手だった。他のシンガーとは一線を画した独自のサウンドの持ち主で、それが人にアピールする心地よいものであれば、ぜったい成功するんだ。彼女にはそれがあったというわけさ」と紹介しています。ここでいうサウンドとは、彼女独特の少しハスキー気味でツヤのある声の質を指しています。

最初に紹介する「アルティメイト・コレクション」には、1960年代のシュープリームスのヒット曲が満載。「キープ・ミー・ハンギン・オン」、私生児やスラムを題材にした社会性のある「ラヴ・チャイルド」「スラムの小鳩」、ダイアナの声がもっとも光っている「ストップ・イン・ザ・ネーム・オブ・ラヴ」など、印象的が曲が多く、今でも通用するアルバム。

ダイアナがソロになった70年代から81年までのヒット曲を集めた「ベスト・オブ・ダイアナ・ロス」は、モータウン・サウンドから離れ、スケールの大き



なバラードやダンスブルな曲が多く収められています。声の質も甘さを控え、少し高めの声にして高音部が生きるフレーズ多用し、ダイアナ・ロスというブラン

ドを完成させることに成功。この成功で、より広範囲のファンを獲得しますが、このアルバムは、そのことを証明しています。また、60年代から80年代の始めまでトップランナーだったことを示すアルバムにもなっています。70年代のダイアナの人気を示す記述として、『リズム&ブルースの死』（早川書房）に「…彼女のショーのチケットを手に入れるには、黒いの、白いの、茶色の、みんな奪い合いだっことを私は知っている。つまり、音楽が肌の色を超越してしまうような、そんなアーティストがいる」と紹介している箇所があります。

3枚目の「ワーキング・オーバータイム」は、89年の作。時代に即応する

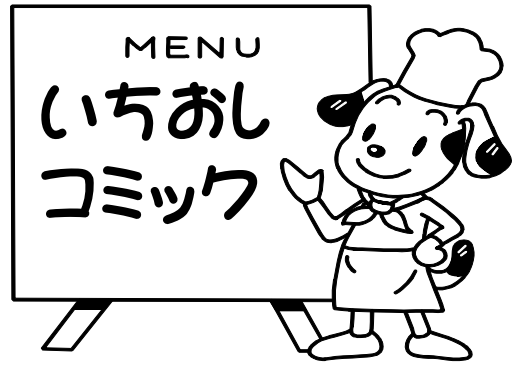


曲が多く、アルバムの解説では、ホイットニー・ヒューストンへの対抗意識が強いと紹介しています。80～90年代のソウル・ミュージックが好きな人にオススメです。

息が長いシンガー、そして、声の魅力が圧倒的で、耳に残るメロディを生んだダイアナ・ロスは、まさしくおとなの音楽です。60年代から30年近くにわたるダイアナ・ロスをお楽しみください。

★日常とともにある心の深みを描く

やまだ紫『しんきらり』（ちくま文庫）
『空におちる』（河出書房新社）
『性悪猫』（小学館）



●まずは、「やまだ紫」さんの紹介から。1948年



年生まれ。69年にデビュー、マンガ雑誌「COM」

「ガロ」に作品を発表。出産・育児で一時休筆。78年の復帰後は多方面に精力的に作品を発表。独特のタッチと心の深淵を描き出す作品は、高い評価を受ける。詩やエッセイにも定評があり、その言語感覚と絵画的センスの融合は、その後の女性マンガに多大な影響を与えた。2006年秋から京都精華大学マンガ学部教授に就任、09年5月没。

●ちくま文庫版の『しんきらり』（1988年）は、1982年『しんきらり』と84年『続しんきらり』を合冊した350ページのボリューム。団地に暮らす夫婦と2人の子ども／姉妹の日常を描いていますが、主人公は妻であり、母でもある女性。

27の短い話が収められ、彼女の視点から子どもの成長や夫との関係、家族の変化を何気ない家族の風景の中で語ります。いかにも〈昭和〉ですが、絵は古びず、彼女の語る言葉や観察は時代を超えて今に生きています。●作中の文／言葉をいくつか借りて作品の魅力を紹介します。＊「人間を産んじゃった」の最後から「自己満足でもしなかったら子育てなんてできやしない…わたしお母さんだからね／その場しのぎでにげられないの／わたしが産んじゃったんだもの」＊「ゴキブリをする」では、「私たちがあなたの実家にいるとき、あなたとご両親と子どもたちは居間でダンランをする／私は台所でヨメをし／頃合いを見て我が子にまでお茶をお持ちする身分なの／両親へたまのご機嫌伺いならそれでいいわ／ヨメでもゴキブリでもする／ただ〈家族会議〉だとかって仰々しくコトをかまえる場に呼ばれるのなら私にも席がほしいわ／台所じゃなく」●皮膚感覚の共感を得る作品です。

●『空におちる』（1985年）は、育児のエッセイと家族〈母と女の子〉を中心に描いた作品。母の側から見た子どもの成長、子どもが女の子になっていくちょっとした気づきを豊かな観察眼と小気味よい文、そして豊かな表情の絵で表現しています。「お母さんの青いエプロン」の文中、女の子が離婚した母親を見て「お母さんは泣かなくなった／頑丈になったと思う／〈ダメなお父さんとダメなお母さんが二人いるより／元気なお母さんが一人いる方がいいと言った〉」と語るくだりは、母親と子どもともどもに強さを獲得していく場面であり、今を描いています。育児のエッセイは、著者の生の感情に触れ、作品に近づくことができる役割を果たしています。



●『性悪猫』（2009年）は、猫を介して著者の詩的世界を表現した作品。中野晴行「マンガで描かれた詩」という巻末の解説がこの作品の良さを表しているので抜粋して紹介を。「…本書では、野良や家猫や子猫や年頃猫…さまざまな猫たちの姿が日常スケッチ的に描かれ、その姿には人間の日常の中の哀しみや愚痴や葛藤が見事に重ねあわされている。そして、猫たちに仮託しながら人間という存在の不思議を少し離れた場所から見ているやまだ

紫という作家の姿がある」。●猫の姿態を借りた作者の言葉は、口にして読むことで、より一層生き生きと読み手に伝わってきます。お試しを。